

小西和の瀬戸内海論のまなざし

野 間 晴 雄

広い区域に亘る優美な景色で、これ以上のものは世界の何処にもないであろう。将来この地方は、世界で最も魅力のある場所の一つとして高い評価を勝ち得、沢山の人々を引き寄せることであろう。此処には至る処に生命と活動があり、幸福と繁栄の象徴がある。他の多くの国民ならば全然植民の余地を見出さないであろう様なこの地域に、すでに天国が出来上がっているのだ！ かくも長い間保たれて来たこの状態が今後とも長く続かん事を私は祈る。

リヒトホーフエン『支那旅行日記 上巻』, 慶応書房 海老原政雄訳, 1943

1. はじめに

リヒトホーフエン (1833-1905) は明治元 (1868) 年 8 月, カリフォルニアでの金鉱調査を終えて, サンフランシスコから出港して中国内陸への調査へ向った。その途次, 瀬戸内海を昼間に通過して, その船上から見える風景の美しさに魅了された。その最大限の賛美を惜しまずに書き記したのが上の文章である。リヒトホーフエンはヨーロッパの地質学者・地理学者の中で, 初めて日本政府より国内調査旅行の許可を得た学者であった (フェルナンド・フォン・リヒトホーフエン著・上村直己訳2013: vii)。その前にも後にも, 瀬戸内海は多くの外国人の賞賛するところとなる。しかし, 日本人にとってこの瀬戸内海の「再発見」は明治後期まで持ち越された (西田正憲1999)。その立役者こそが, これから考察する小西^{かなう}和である。

瀬戸内の地域は海と陸の接点である。700有余に及ぶ島々と, 7,230km にも

及ぶ長い海岸線を有している¹⁾。水面面積は23,203km²、平均水深38m、容積8,815m³、流域人口約3,000万人である。水面面積で東京湾の約16.8倍あり、日本で最大の地中海である。瀬戸内海をはさみ、近畿・中国・四国・九州の11府県(大阪、兵庫、和歌山、岡山、広島、山口、香川、愛媛、徳島、大分、福岡)と海岸線は接する。その島嶼数は727である²⁾。ただし領海としては、豊後水道域は瀬戸内海に含まれない。瀬戸内はこの海全体を指す言葉であるとともに、陸地(島および本土の沿岸)をも含んだ全空間を指す地域名称でもある。約3,500万人の人口を擁し、我が国人口の約28%を占めている。人口密度では瀬戸内海区域では全国平均の約1.9倍、1 km²当たり623人(全国平均は1 km²当たり336人)にのぼり、瀬戸内海沿岸域への人口集中を表している³⁾。関係する府県内においても、府県全体が瀬戸内区に指定されている府県を除くと、瀬戸内海区域での人口密度は府県全体よりも高くなっている。

瀬戸内海は、古代以来、東西の海上の大動脈であり、域内のローカルな交流にとどまらず、域外との交流を通じて、広域ネットワークが形成されてきた。その分、沿岸の近代の広域にわたる陸上交通の発達は遅れ、神戸～下関間の山陽本線538kmが全通したのは明治37(1901)年と、東海道本線の全通より12

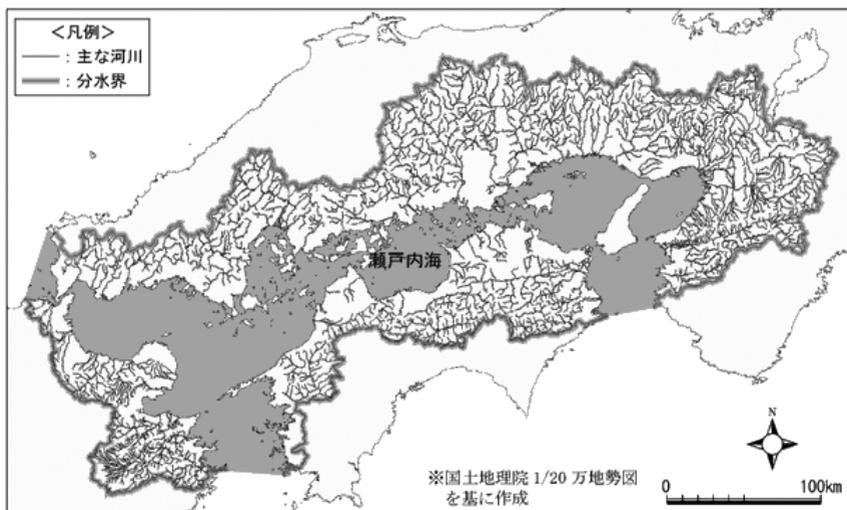


図1 瀬戸内海の範囲

年後である。

瀬戸内は花崗岩質の風化した陸域からの土砂の供給によって白砂青松の風景をつくりだすとともに、森林伐採、はげ山、段々畑、塩田、干拓、鉄鋼・石油化学・化学工業などの複合した臨海工業地帯など、土地に刻まれた可視的な開発史が幾重にも層として重なっている。この特色は、かなり明瞭に環境史がたどれるフィールドであることを示唆する。

この小論では、香川県の農村に生まれ、島々が内海に点在する独特の個々の瀬戸内の事物や名所・旧跡を高く評価しながら、その海域や沿岸の気候・地形・地質・植生・水文や海洋の特質も重視し、産業やその将来像まで地政学的考察を行なった明治後期の人物、小西 和^{かなう}（1873-1947）に焦点をあててみたい。筆者は最近、岡山大学で開催された人文地理学会・地域地理科学学会合同のシンポジウム「瀬戸内海の再発見」で、「3つの瀬戸内論の来し方・行く末—小西 和、宮本常一、河野通博—」というテーマで発表した⁴⁾。瀬戸内、瀬戸内海をトータルにとらえる議論を異なる経歴をもった3人の著作をとりあげつつ、3人が生きた近現代の瀬戸内地域に起こった出来事と彼らの生きざまを重ね、さらにそのライフストーリーや実践を横軸に並べて比較した。さらに彼らの地域へのまなざしや、彼らに触発された研究や著作を論評するという、学会での発表スタイルや構成としては異色であった。この3人のうちで最も早い時期に活躍したのが小西和である。

本稿の目的は、シンポジウムでの考察のもとになった小西の代表作『瀬戸内海論』（1911）の詳細な内容の考察と、彼の瀬戸内地域、瀬戸内海に寄せるまなざしを、書誌事項やとりあげた事象、題材から分析する。いわば上記の発表のもとになった小西和の書誌的小論である。

2. 小西和の生い立ちとライフコース

小西和は香川県寒川郡名村（現さぬき市長尾^{さんかわ}名^{みょう}）の有力な地主の家に、明治6（1873）年4月26日に生まれた（写真1、写真2）。東京朝日新聞記者、日本海洋会理事、南満州製糖⁵⁾取締役社長、亜細亜煙草株式会社・業煙草株

式会社・東亜拓殖興業株式会社の取締役などを歴任した⁶⁾。明治45(1912)年、香川1区より衆議院議員に立候補して以来8回当選している。憲政会党務委員長、立憲民政党総務を歴任し、1928年の第14回万国議員商事会議(パリ)以来、第25回列国議会同盟会議(ベルリン)にも参列している国際派の国会議員であった。



写真1 小西和の生家跡
(筆者撮影 2017年5月)



写真2 小西本家
(筆者撮影 2017年5月)

小西の本格的単書としては上記の著作以外に『日本の高山植物』(1906)がある。これは小西が東京朝日新聞の記者時代に連載した記事を一書にまとめたもので、高山植物の啓蒙書としては先駆的な著作である。わが国で登山趣味が隆盛になってきた時期に、より高度な自然への接し方として、高山植物の観察や採集、培養を鼓舞する先駆的な書である。自叙で「欧羅巴に於てはアルプス山に、亜米利加に於てはロッキー山脈に登攀して、^{ほしいまま}恣に荘嚴雄偉の風向に接し、且其地域の風光に接し、且其地域に自生せる、珍草奇花を賞観採集して、一大快樂とするもの、比比皆然らざるなきの状態なり。」としてその類書が多いことを指摘する、わが国でも「富士、新高の二山を始め、信飛、甲信、加越、日光、奥羽および北州の如き、峻嶺幽谷に乏しからずして此等の地域における繁茂せる植物も亦太だ多し」(小西和1906:1)という、植生・植物種の豊かさを背景として登山ブームが日本に到来しようとする時期あった。しかし本書は高山植物の生態、特徴、生理、解剖などの分野には深く踏み込みこんでいな

い。むしろ代表的高山植物の記載を中心に、登山者が高山植物を観察、採集するための実用的知識の提供に重点が置かれている。そのため表1のように、高度による植物の違い（喬木帯、灌木帯、草木帯、地衣帯）の解説やその分布、日本アルプスにおける高山植物の詳細、植物採集の実際や腊葉（押し葉標本）の作成法などが後半で多くの頁が割かれている

小西がこの書を刊行した当時、日本の植物学（分類学、形態学、解剖学、分布学）を樹立した三好学（1862-1939）は次々と啓蒙的な植物に関する著作を出版していた。アカデミーの頂点にいた三好には、野山を跋涉するのみならず、実験室で顕微鏡を覗きながら些細な観察も要求される。旅行の途次にみる「日々目に触る草木の種類を知り、又其分布上の観念などを有するとせば、彼の単に山水風景の奇勝を賞鑑するものに比して興味の一層大なる明かなり」（三好学1910：697）とする考え方が熟する前に、分布やその個別記載の著作を出していた時期であった。その植物の詳細スケッチをいれた個別植物の記載の三好の到達点が『日本の植物界』（1910）である。

表1 小西和『日本の高山植物』（1897）の目次

| | |
|----|------------------------------------|
| 第一 | 高山植物の意義 |
| 第二 | 登山と高山植物 |
| 一 | 我国に於ける登山の風潮、二 真の登山趣味、三 欧米の登山と其団体、 |
| 四 | 高山植物に関する智識 |
| 第三 | 高山植物の状態 |
| 一 | 植物の分布と其区系、二 水平的区系と垂直的区系、三 天然の花園、 |
| 四 | 高山植物の区系、五 緯度と高山植物帯、六 高山植物帯の高度及び植物、 |
| 七 | 平野に高山植物（樺太従軍録の一節） |
| 第四 | 各帯の高山植物 |
| 一 | 喬木帯、二 灌木帯、三 草木帯、四 地衣帯 |
| 第五 | 高山植物分布の根原 |
| 一 | 高山植物分布の歴史、二 日本と高山植物 |
| 第六 | 日本のアルプス |
| 一 | 我国に於ける真正の深山幽谷、二 富士山と日本のアルプス、 |
| 三 | 秀幽なる日本のアルプス |
| 第七 | 高山植物の研究と其培養 |
| 一 | 高山植物の研究、二 高山植物培養園、三 下等隠花植物の研究、 |
| 四 | 高山植物の培養 |
| 第八 | 登山の準備と戒心 |
| 一 | 登山の長短と難易、二 登山の準備、三 登山の戒心、四 登山者と徳義 |

第九 植物採集と腊葉製造

- 一 登山及び採集の好季節、二 植物採集及び腊葉製造の器具、
三 高山植物採集の方法、四 腊葉製造の方法、五 標本製造の方法、
六 標本保存の方法、七 採集者の徳義

第十 日本人と高山植物

小西は札幌農学校在学中に両親や親戚を説き伏せて郷里の田畑を売却し、北海道石狩郡栗沢村（現・岩見沢市栗沢町小西）の開拓を先導する。この小西集落の小西八幡神社境内にある小西開基百年記念碑には、以下のような開発の契機の様子が記されている（郷土資料「岩見沢市各種記念碑等」研究調査実行委員会2012：61）。

小西部落ノ開創ハ、明治二十六年香川縣人小西和氏未開地二百七十町歩ノ貸下ヲ得、郷里ヨリ多数ノ移住者ヲ誘導入地開墾ニ着手ス當時千古不拔ノ曠野熊鹿狐狸ノ巢窟タリシガ、氏ノ慰撫激勵ニ移住民ハ困苦缺乏ニ耐エ酷寒炎暑ト闘ヒ畑地ニ成墾ス。明治三十九年自作農開放後、栗沢北海兩土功組合設立ニ依リ、部落機関ヲ整備ス、大正三年以來備荒貯蓄ヲ励行シ、經濟力強化精神作興風紀ノ改善、産業ノ振興勤勞ノ力行ニ励ミテ、和協一致ノ成果ハ、部落今日ノ發展ヲ見ルニ至ル。昭和五年電動力ノ架設ニ依リ農村文化ノ恩恵ニ浴ス。昭和十四年二月報徳社ヲ結成シ、部落ノ運営ハ報徳道ニ則リ、道德經濟ノ一體化ヲ計リ永安樂土ノ建設ニ邁進ス。顧フニ本道開拓ニ垂レサセ給ヒシ、聖慮ヲ奉體シ草創開墾ニ苦心經濟セラレタル父祖先輩ノ効績ニ、報恩感謝ノ誠衷ヲ表シ之ヲ永久ニ諒ズ茲ニ開基五十周年ヲ記念シ、來歴ノ一端ヲ勒シ以テ後昆ニ傳フルモノナリ。

昭和十八年十二月八日 紀元二千六百三年 建之

小西報徳社 暁 雲 謹書

郷里の小作人によって拓かれた270町歩の農地は、明治39（1906）年に小作人に払い下げられ、栗沢と北海の両土功組合を設立し、集落の形成もなされた。昭和14（1939）年には、小西報徳社を設立している。これは幕末の思想家二宮

尊徳（1787-1856）の唱道した互助的金融、殖産興業、農業改良事業などを行った精神的、経済運動であり、至誠、勤労、分度、推譲の報徳四綱領を社員家族一同が実践してきた⁷⁾。この美田化の陰には、小西和の野心と人を惹きつけてやまない魅力、それを支援した父や親戚、さらには弱冠25歳の郷里のエリートに人生を賭けた小作人たちの度量があった。ちょうど北海道開拓のブームに乗り、日本のフロンティアスピリッツが北門の大地に華開いた時期と重なった幸運もあった。しかし、小西の拡大主義は農場経営の破綻を引き起こすことになる。明治30（1897）年には小西は開拓地で酒造業を始め、同31（1898）年には、十勝地方に第二農場を設立する。開拓当初はアワ、キビ、アズキ、トウキビ、バレイショなどの畑作物を栽培した。標高12m前後の低地のため、樹林を伐採し開拓後に排水路を建設、湿地改良をして米作への移行を試みるなど、飛ぶ鳥を落とす勢いで経営拡大をしていった。しかし、日清戦争で軍需用品として需要のあった亜麻が戦後に急激な需要減となったこと、さらには明治31（1898）年9月の台風による石狩川氾濫で大きな被害をだし、自らが長を勤めた郵便局（清眞布郵便局）の局員の不正や、酒造業の資金繰りが苦しくなって、明治32（1899）年12月に小西農場は破綻する。

小西の北海道日記や投稿した新聞記事から北海道での農場経営の時代を詳細に掘り起こした町田三郎は「ひと筋に夢を追った和の青春はここに終わる。26歳の冬のさなかである」（町田1999：130）と結んでいる。

青春は終わったが、小西は生きるため、妻子を養うために上京し、月給16円で東京市役所会計課雇員となる。その薄給を補うべく、画才を活かして自作の絵画を売って生活するところがいかにも小西らしい。その後、東京朝日新聞社主の村山龍平に、これまでの書いた新聞記事などをもとに売り込み、学芸部記者となる。その給料は交通費を合せて120円となり、家政婦を置くほどの余裕も生まれる。その後、小西は、志賀重昂の風景論や近代日本が獲得した風景観を下敷きに、山のみならず、水（内海）がある瀬戸内の風景を「再発見」し、その保全と観光化を促進する方向性を導き出した。それは近年隆盛の「観光へのまなざし」に連なる視点（白幡1993）でもあったところに新鮮味がある。

3. 『瀬戸内論』の内容と構成

多感な青春を経て、自らの筆力と経験を売り込んで途中入社した東京朝日新聞社の学芸部では、社主村山龍平（1850-1933）の推挽を受けて、小西は日露戦争の従軍記者という花形のキャリア2年間を無事全うした。そして小西は、明治38（1905）年、1年の慰労休暇と特別賞与2,000円という大金を得る。

しかし小西が次にとった行動は、この休暇の時間とお金を瀬戸内の広域調査とそれをもとにした大著の執筆に惜しみなく充てたことである。このあたりの思い切りの良さは、彼の生涯を通じてずっと持続していった。そうして4年後に完成したのが『瀬戸内論』全1000頁におよぶ大著である。コロタイプ、銅版、木版、電気凹版、編目写真版、クローン、エングレーヴ版など当時のあらゆる製版技術を駆使して製作された⁸⁾ 定価4円50銭の豪華本の学術書であった。しかもその図の多くは筆者が考案・作図した主題図であり、自ら絵筆をとったスケッチもある。軍港などの写真も調査許可を得て挿入し、多くの官公庁、社寺、団体法人、船舶などへの照会もしている。まさに瀬戸内海の海洋学、さらには人文も含めた百科全書をめざしたものであると表明している（凡例1頁）。

本章ではこの内容をいくつかの観点から分類、分析して、小西の瀬戸内地域に対するまなざしを検討してみたい。

この著の目的は序文で次のように述べている。

瀬戸内海は又その一部〔筆者注：日本を構成する花彩島〕に囲まれたる、小さい水溜のみ。併し乍ら、この中には港湾、灘、瀬戸、島嶼、波濤、潮流などがあり、無数の生物も住んで居れば、数多の船舶も浮かんで居る。勿論、その中にはその沿岸には都会と村落が点綴し幾百万の人々が絶えず活動して居るのである。加之ならず無比の風光を描出して、西洋人から世界の公園、現世の極楽と云ふ、賛美的呼称を得て居る許りでなく、我が国の産業乃至美術工芸の如き何れも皆内海方面から発達したのではないか。（『瀬戸内論』1頁）

地学、自然現象を重視しながら人文現象もとりあげること、「瀬戸内海の方面は大陸の関係が極めて複雑で自ら学術上の諸般の現象を展示して居る。故にこれを研究すれば世界の多くの場所を周遊して、始めて取得すべき事柄を了解し、或いは推考し得えるわけである。この点に於いても亦内海は極めて大にして、又極めて貴いものと謂ふべきであろう」（1頁）と主張するように、日本のひとつの典型を瀬戸内海に見出している。

その執筆の契機は、2年間満州、北清の地を跋涉して、シベリア・樺太も経験した小西が、乾燥無味な風光に飽きたあとにみた瀬戸内海の風景の再発見であった。

以下に章ごとにその主要目次を示して(表2)、全体の構成の特徴を述べた後、各章⁹⁾ごとに、その内容と小西のまなざしを検討する。

まず、第1が瀬戸内海を定義し、第2から第5まではその自然地理学的特色を記述する。第6が瀬戸内海沿岸の港湾誌、第7が海嶼誌、第8から第10までが海洋学的記載、第11が気象、第11が「海陸の生物と産業」として、海陸の動植物を一体として扱う。そのために農業や水産業もこのなかに含まれることになっている。ただしその比重は高くない。第12は水運と水師つまり水軍を扱う。第13は「瀬戸内海と人生」として人文現象を取り上げる。人生とは漢語で、『岩波漢語辞典』（1989）では、①人生、②人間としての生活の意味とある。ただし語感として「生」とは違ってその使用は人間に限定され、「一生」や「生涯」に比べ、事実よりもそれについて思考するときに用いられる¹⁰⁾。小西の語法はこの用法に近く、瀬戸内海と人文現象との関係を論じている。

第14は瀬戸内海に関わる研究動向の余滴というべきものであるが、自然現象に関わるものが中心である。そのあとには6節として「風景の分類観察」という注目すべき海陸両方を加味した彼独自の日本の景観分類がある。以下がその概要である。なお（ ）のあとの解説に続く事例は、小西があげている瀬戸内の事例から、私が主な地名を抜粋したものである。

1. 富士式（崇高）火山の噴出によるもの。讃岐富士（飯野山）、豊後富

表2 『瀬戸内海論』(1911)の目次細目

| | |
|-----|---|
| 第1 | 瀬戸内海とは如何 |
| 1 | 海の大小と価値, 2 比較物の探索, 3 地中海と瀬戸内海, 4 瀬戸内海的位置 |
| 5 | 南日本と瀬戸内海, 6 瀬戸内海の概観, 7 世界的水路と瀬戸内海, 8 内海の研究と其調査 |
| 第2 | 瀬戸内海の構造 |
| 1 | 内海的位置と人文, 2 太平洋沿岸の特色地勢, 3 南日本の内帯と外帯, 4 瀬戸内海の成因 |
| 5 | 瀬戸内海の地史 |
| 第3 | 地貌と地質と土性 |
| 1 | 南日本の地貌と地質, 2 内海方面の火成岩類, 3 内海方面の水成岩類 |
| 4 | 珍奇な岩石と特殊の地質, 5 内海方面の土性 |
| 第4 | 沿岸の山河と湖沼 |
| 1 | 内海方面の山嶽, 2 火山と内海の景色, 3 特徴ある河川, 4 天然の湖と人工の池 |
| 5 | 輪廻の大法と山河の老幼, 6 近畿の山河, 7 中国の山河, 8 四国の山河, 9 九州の山河 |
| 第5 | 瀬戸内海の海岸線 |
| 1 | 海岸線の状態と特徴, 2 海岸の移動, 3 真の白砂青松, 4 半島と岬角 |
| 5 | 豊後紀伊両水道の海岸 |
| 第6 | 瀬戸内海の港湾 |
| 1 | 港湾の分類の観察, 2 内海の港湾の良否, 3 港湾調査会と内海の港湾, 4 地方的の港湾と其修築 |
| 5 | 大阪湾の概観, 6 神戸港の概観, 7 関門海峡と関門の両港, 8 広島と宇品, 9 呉軍港の概観 |
| 第7 | 花彩島中の花彩島 |
| 1 | 瀬戸内海式の島嶼, 2 内海の島嶼と人文, 3 内海の島嶼の長兄, 4 風骨非風の小豆島 |
| 5 | 多方面なる芸予叢島, 6 盛装を凝せる巖島, 7 姫島は内海の別天地 |
| 第8 | 内海の広狭と深淺 |
| 1 | 内海の水平的観察, 2 内海の垂直的観察, 3 瀬戸内海の底質, 4 瀬戸内海の灘 |
| 5 | 地学上の珍な現象, 6 瀬戸内海の海峡 |
| 第9 | 瀬戸内海の潮水 |
| 1 | 満干と潮流, 2 瀬戸に特有なる急潮, 3 瀬戸内海の波涛, 4 海水の温度 |
| 5 | 海水の成分と比重, 6 海水の色彩と其透明の度, 7 海洋の科学と瀬戸内海 |
| 第10 | 内海方面の気象 |
| 1 | 温帯の気象と瀬戸内海, 2 内海の気象と人文, 3 内海方面の気圧, 4 風向と風速度 |
| 5 | 半海洋半内陸性の気温, 6 湿度と水蒸気張力, 7 適當なる内海方面の降水 |
| 8 | 優美なる内海方面の霜雪, 9 好晴なる内海方面の天気, 10 気象が及ぼす諸般の影響 |
| 第11 | 海陸の生物と産業 |
| 1 | 陸上植物の概観, 2 内海方面の山林, 3 園芸的の農業, 4 陸棲動物の概観 |
| 5 | 海産植物の概観, 6 大切なる浮遊生物, 7 海産動物の概観, 8 周約なる水産業 |
| 第12 | 内海の水運と水師 |
| 1 | 日本の生氣の根本, 2 過去に於ける概観, 3 現在の活動振り, 4 将来の水運と内海 |
| 5 | 瀬戸内海の航路標識, 6 水師と瀬戸内海, 7 瀬戸内海と海員, 8 瀬戸内海と海洋飛躍 |
| 第13 | 瀬戸内海と人生 |
| 1 | 山水と人生の關係, 2 内海方面の人口, 3 行政区画と遷都問題, 4 内海と經濟の關係 |
| 5 | 内海方面の貿易と商業, 6 内海方面の工業, 7 内海方面の鉱業, 8 内海方面の鉱泉 |
| 9 | 内海方面の都会, 10 宗教と信仰と社寺, 11 内海方面の城と公園, 12 西洋人と瀬戸内海 |
| 第14 | 内海關係の二三の學術 |
| 1 | 天文に関する現象, 2 磁石の北と眞の北, 3 内海方面と地震, 4 瀬戸内海と海嘯 |
| 5 | 瀬戸内海は領海か公海か, 6 風景の分類の観察, 7 先住人の遺跡と遺物, 8 地名と姓氏の研究 |
| 9 | 俗語と方言の研究 |
| 第15 | 瀬戸内海の前途は如何 |
| 1 | 海洋の開拓と瀬戸内海, 2 内海の活用策と其繁榮策, 3 同心協力一致結合 |
| 4 | 海主陸従の主義, 5 内海の整備と外洋の發展 |

士（由布岳）

2. 巖島式（爛美）局地的地盤の陥没と風水の浸食による不規則な凹凸。安芸灘，備讃瀬戸，芸予海峡
3. 橋立式（優雅）潮流と波によって形成された砂洲。下松，室積の海道の松原，讃岐引田の安土池
4. 松島式（鮮麗）水成岩が波浪によって浸食された地形。淡路島の岩屋の絵島
5. 耶馬溪式（奇抜）火山岩の風化と侵食の地形。耶馬溪，小豆島の神懸，多度津の弥谷
6. 武蔵野式（蒼茫）第四紀の低平な台地原野
7. 御嶽式（豪宕）古生代・中生代の岩石からなる高山。石鎚山，弥山（大和）
8. 日光式（瑞巖）絢爛たる建物と風景の調和。春日大社，信貴山，金比羅山
9. 遠州式（森漫）海岸平野
10. 木曾式（幽邃）深山靈谷。吉野川上流（大和），肱川（伊予）

第15は瀬戸内海の将来をいくつかの点から提起している。まず海面開拓の進展への危惧が述べられ，良好な風景の保護，観光施設の充実，とりわけ外国人観光客の招致とその対応（ホテル建設）を主張する。さらに「同心協力一致結合」では県の枠組みを超えて経済協力や地域振興をはかることを強調する。「海主陸従の主義」では，沿岸よりも島嶼や瀬戸内海そのものを重視する海洋主義を全面に出す。それはこの書の巻末で「現在の世界は，国際的競争の時代で，我が国に於いては，向後，内乱や革命の憂が絶無である筈。この時に当り，徒に祖先の功蹟を渴仰し，其偉業を襲踏して，一局部にのみ執着するは勿論，策の得たものではない，須く海国民たつ技能を研磨して，着々海洋に発展すべきである」（『瀬戸内論』，985-986頁）。これがまさにこの書物の意図であり，「内海方面の整備を謀り，根柢を内海に据へて，外洋に発展するのは，この方面の人々の責務であり，又権能でもある訳」（同986頁）とする。

乾燥無味な大陸的気風に拘泥する非梅雨を認めない。さりとて、頑冥な島国根性に纏綿するのは、素より取るべきではない。飽くまで開潤広大な海国的素質を發揮]することを鼓舞する。日露戦争に勝利した当時の日本の海外進出に、清濁併せ呑む姿勢でとりくむべき心構えを小西は説いている。小西は瀬戸内海を南日本の中心、日本文化の揺籃の地ととらえ、その景観保全や観光開発を推進する一方で、それに拘泥せずに、海洋進出のグローバルとローカルの両面を強調する地域論、地政学論となっている。

本書ではじつに多くの写真や絵画、スケッチ、地図が全編にわたって挿入されている。それとともに、広島県立商船学校（備後の大崎上島）¹¹⁾には以下のような筆者の説明がある。

芸予海峡の間に横たはる大崎島は、古来帆船の数が甚多く、大崎船の名が遠近に轟いて居る。従って航海に関する学術と技芸を授け、高等海員を養成するのは、場所柄として極めて必要。明治三十一年に此学校が起り[マ]、既に幾多の卒業生を出して、我が海運業の上に、少なからざる功績を挙げつゝあるのは、誠に結構。附属の練習船は、総噸数百八十噸の三宝丸と云ふ帆船。（『瀬戸内論』393頁）。

体言止めが多用され、その筆者独自の評価（ここでは結構、極めて必要）がされているのは、本書をユニークな存在にしている。この写真は芸予諸島のなかに配置されている。このほか、瀬戸内の沿岸や島嶼に位置する江田島の海軍兵学校や呉海軍工廠、弓削商船学校、児島商船学校、大島商船学校なども写真で紹介されている。決して風景のみに偏した瀬戸内論ではない。

表3は私が小西の著書全編にわたって、図表を巻末の図画索引¹²⁾も参考にしながら、地域別に、そのタイトル、種類(写真、絵画、オリジナルな主題図、地形図、地質図、断面図)などをその著作権者名がわかる範囲で記したものである。このデータベースによると次の点が指摘できる。

その地域区分は小西の著書巻末の「図画の索引」によった。29の地域に区分されている¹²⁾。

①大阪の方面、②京都の方面、③近畿、④大阪湾と大阪・神戸の両港、⑤

小西和の瀬戸内海論のまなざし（野間）

表3 小西和『瀬戸内論』の地域別図表一覧とその種類A

| 番号 | 大阪の方面 | 京都の方面 | 近畿 | 大阪湾と大阪・神戸の両港 | 淡路と由良・鳴門の両海峡 | 明石海峡 | 播磨灘と播磨 |
|----|-----------|-----------|--------------|---------------|-------------------------|------------------|----------------------------------|
| 1 | 淀川の三角州の発達 | 御所 | 木津川畔の竹林(山城) | 大阪湾の断面図 | 淡路島の地図を描き成生の順序と地質の概要を示す | 明石瀬戸及び其付近の図 | 播磨灘上から四国を望む〔著者〕(スケッチ) |
| 2 | 大阪城と其古図 | 二條離宮 | 石山の卓石(近江) | 大阪港 | 伊弉諾神社(淡路) | 明石海峡〔岡本月村〕山水図カラー | 播磨灘の南西大串岬と釈迦ヶ鼻の間の深淺を示す図〔著者〕(断面図) |
| 3 | 大阪城の巨石 | 京都帝国大学 | 竹生島(琵琶湖) | 学生の端艇旅行(大阪港) | 淳仁天皇の御陵(淡路) | 武庫離宮地〈写真〉 | 赤穂の華岳寺〔播磨名所図絵〕 |
| 4 | 造幣局 | 東本願寺 | 国宝中の国宝(法隆寺) | 大阪の築港 | 岩屋の絵島(淡路) | 一の谷の古墳〔摂津名所図会〕 | 曾根の松(播磨)〈写真〉 |
| 5 | 天王寺公園 | 東寺(古都の暁霧) | 如意輪堂(吉野山)の桜花 | 大阪の高燈 | 洲本と先山(淡路) | 明石城(播磨)〈スケッチ〉 | 姫路城(写真) |
| 6 | 住吉神社の祭礼 | 加茂の葵祭 | 楠公の遺跡たる金剛山 | 天保山の古い景色 | 洲本の海水浴場(淡路) | 明石瀬戸と舞子浜より望む〈写真〉 | 書写山〔谷文晁〕 |
| 7 | 海員寄宿所 | 淀川の上流 | 浜寺公園 | 木津川口(大阪) | 洲本の紡績工場(淡路) | | |
| 8 | 大阪ホテル | 宇治の平等院の模型 | 大鳥神社 | 安治川口 | 鳴門海峡及び其付近図 | | |
| 9 | 雑魚場 | 宇治の茶園 | 大鳥神社、花摘祭(和泉) | 神戸の海陸概図 | 鳴門海峡〔著者〕 | | |
| 10 | | 小倉山の勒額 | 百舌鳥耳原の三陵 | 神戸、海陸断面図 | 鳴門海峡の急潮(写真) | | |
| 11 | | 大沢池 | 妙国寺の蘇鉄(堺) | 和田岬 | 堀越の急潮(鳴門海峡)〈写真〉 | | |
| 12 | | 嵐山 | 尼ヶ崎の鯖市 | 神戸の海岸 | 女夫岩(鳴門海峡)〈写真〉 | | |
| 13 | | 保津川の急淵 | 箕面滝 | 神戸の海陸運輸連絡設備工事 | 鳴門の渦巻〔茗節北斎〕 | | |
| 14 | | 昔の火災 | 鉾泉の汲取(摂津の平野) | 三菱造船所の浮船渠(神戸) | 鳴門の外側の逆巻く波〈写真〉 | | |
| 15 | | | 有馬温泉場 | 楠本正成の墓碑(神戸) | 由良海峡の図(地図30万分の1) | | |
| 16 | | | 荒廃せる山地 | | 由良海峡〔岡本月村〕 | | |
| 17 | | | | | 由良海峡〔紀伊名所図会の一部〕 | | |
| 18 | | | | | 友ヶ島燈台(由良海峡)〈写真〉 | | |
| 19 | | | | | 和歌の浦(紀伊)〈写真〉 | | |

表3 小西和『瀬戸内論』の地域別図表一覧とその種類B

| 番号 | 讃岐 | 小豆島 | 備讃瀬戸と水島灘 | 吉備の方面 | 燒灘と備後灘と鞆津の方面 | 伊予 | 芸予海峡 |
|----|-----------------------------|------------------------------|----------------------------------|-------------|--------------|------------|------------------|
| 1 | 高松城（讃岐）〈写真〉 | 愛すべき小豆島（熊子木孟郎）〈スケッチ〉 | 備讃瀬戸（海図をもちいた概図） | 岡山城 | 燒灘の眺色 | 高浜・松山・道後の図 | 芸予海峡の概図 |
| 2 | 高松の栗林公園〈写真〉 | 旧象の遺骨（写真） [東京港師範学校所蔵] | 備讃瀬戸の古図〈写本〉 | 岡山の後楽園〈写真〉 | 四坂島の精錬所 | 高浜港 | 長瀬戸の一部分の平面及び断面図 |
| 3 | 祭礼の御船（高松）〈写真〉 | 小豆島の東半部〈スケッチ〉 | 屋島と五剣山〈スケッチ〉 [著者] | 後楽園の鶴 | 燒灘の眺望 | 三津浜の魚市場 | 瀬戸の群集 |
| 4 | 田井の朝鮮土器（讃岐）〈スケッチ、筆者〉 | 神懸方面の図〈主題図〉 | 花崗岩の採取（備讃瀬戸の犬島）〈写真〉 | 藤戸方面の海陸変遷の図 | 中国の地貌 | 大山寺 | 弓削商船学校 |
| 5 | 瀧池の群集（讃岐）（五万分の1地形図より縮写抜き出し） | 内海湾（小豆島）〈写真〉 | 浮島の状をなせる小豆島（備讃瀬戸）〈スケッチ〉 [著者] | 児島商船学校 | 四国の地貌 | 松山城 | 広島県立商船学校（大崎上島） |
| 6 | 長尾の字佐神社（讃岐）〈スケッチ、筆者〉 | 神懸の紅雲亭（小豆島）〈写真〉 | 男木島の燈台（備讃瀬戸）〈写真〉 | 小島商船学校、愉伽山 | 鞆津及び阿武菟崎 | 道後温泉場 | 来島海峡の図 |
| 7 | 津田の松原（讃岐）〈写真〉 | 神懸（小豆島）の塚雲壇 [中村不折] 〈スケッチ、彩色〉 | 男木島 [鹿子木孟郎] 〈絵画、彩色〉 | 牛窓港 | 鞆津と弁天島 | 高縄半島 | 来島海峡、景色 |
| 8 | 白鳥神社（讃岐） | 神懸の帽子岩 | 高松の築港（地図） | 東大川と西大寺 | 鞆津の眺望 | 今治の総社川 | 来島海峡、中渡水道 |
| 9 | 引田の安土池（讃岐）〈写真〉 | 四望頂（小豆島の神懸）〈スケッチ〉 | 備讃瀬戸の連絡船（スケッチ） [著者] 鉄道院連絡船土庄も | 久米の誕生寺（美作） | 阿武菟崎 | 別子の銅山 | 布刈瀬戸 |
| 10 | 貝の化石（讃岐）〈スケッチ、筆者〉 | | 宇野港（備讃瀬戸） | 吉備の豪溪 | 阿武菟崎、観音 | 別子、索道 | 優美なる尾道港 |
| 11 | 湾曲する和泉砂岩層（大坂峠）（筆者模写図） | | 坂出の塩田 | 貝の化石（備中） | 梶子瀬戸 | 石植山 | 農商務省の内海実験所（尾道瀬戸） |
| 12 | 五剣山を志度から望む（讃岐）〈写真〉 降雪 | | 備讃瀬戸の西端、丸亀市塩飽島間の断面図 | 禿山の砂防工事 | | 石鎚山、絶頂と登山者 | 糸崎の方面（三原瀬戸） |
| 13 | 源平屋島の古戦場（讃岐）〈写真〉 | | 花彩島の標本たる塩飽諸島 | | | 長浜付近の海岸の山脈 | 三原瀬戸 |
| 14 | 屋島山並びに五剣山方面の地質と土性を示す図（主題図） | | 波節岩と其の挂燈立標 | | | 大洲方面の山河 | 大三島の大山祇神社 |
| 15 | 屋島の南大観其1ー屋島の詠嶺から東を望む（山内恩徳） | | 多度津の築港 | | | | 内海の「新桃源（生口島）」 |
| 16 | 屋島の南大観其2ー屋島、獅子の巖龕から西を望む（筆者） | | 瀬戸島付近の鯛魚 | | | | 大崎上島の長浜渠造船所 |
| 17 | 屋島の豊石（讃岐）〈写真〉 | | 鯛の大網の根拠 | | | | |
| 18 | 屋島寺（讃岐）〈写真〉 | | 鯛の輸送 | | | | |
| 19 | 白峰の古蹟（讃岐）〈スケッチ〉 [?] | | | | | | |
| 20 | 讃岐富士（飯の山）〈写真〉 | | | | | | |
| 21 | 丸亀・多度津・琴平並びに方面の図（地図） | | | | | | |
| 22 | 丸亀城（讃岐）〈写真〉 | | | | | | |
| 23 | 多度津の浜の貝採り（小杉未醒）〈スケッチ〉 | | | | | | |
| 24 | 弥谷の石刻（讃岐）〈写真〉 | | | | | | |
| 25 | 善通寺（讃岐）〈スケッチ〉 [著者] | | | | | | |
| 26 | 象頭山（讃岐） [筆者] | | | | | | |
| 27 | 金比羅神社の拝殿〈写真〉 | | | | | | |
| 28 | 昔の金比羅參詣 [金比羅參詣腰栗毛の挿画] | | | | | | |
| 29 | 琴弾山（スケッチ） [著者] | | | | | | |

表3 小西和『瀬戸内論』の地域別図表一覧とその種類C

| 番号 | 芸備 | 安芸灘と広島湾 | 厳島 | 伊予灘と姫島 | 別府温泉場 | 二豊と阿蘇 | 周防灘・上の関・大島 |
|----|-------------|---------------|-----------------|-------------------|----------------------|-------------|-----------------------|
| 1 | 福山城（備後） | 安芸灘の展望 | 厳島概図 | 豊後水道の大観 | 別府温泉海陸概図 | 御所ヶ谷の神龍石 | 周防灘・上の関・大島上の崎・大島 |
| 2 | 阿賀の二級滝（安芸） | 広島湾の大観 | 厳島の海岸〔中村不折〕 | 豊後水道、全景 | 別府温泉、大観 | 宇佐神宮 | 周防灘から遙に二豊の連山を望む |
| 3 | 広島城 | 広島湾の概図（海図） | 精巧なる厳島神社の模型 | 豊後水道、深浅図 | 別府湾と国東半島 | 寄藻川の呉橋（豊前） | 周防灘における我が艦隊 |
| 4 | 広島城、泉邸 | 猫瀬戸の深浅と潮流を示す図 | 御床浦（厳島）（写真） | 地藏岬と（関崎）と其燈台 | 別府温泉場と鶴見・由布の二獄〔高島北海〕 | 独立自尊の碑（中津） | 挂燈立標（本山岬） |
| 5 | 砂防工事の成績（安芸） | 情島 | 大野瀬戸 | 佐賀関の上浦 | 由布と鶴見の両獄方面の縦断面図 | 耶馬溪の図 | 丸尾崎 |
| 6 | | 音戸瀬戸より猫瀬戸を望む | 厳島の神鹿（写真） | 豊後水道の大観管 | 由布嶽と志高湖 | 耶馬溪、青洞門 | 上の関と柳津の方面の景 |
| 7 | | 音戸の清盛塚 | 厳島の神鳥（厳島図全より転写） | | 別府湾と高崎山 | 耶馬溪、羅漢寺 | 上の関海峡 |
| 8 | | 厳然たる呉軍港 | 厳島の鳩（写真） | | 血の池地獄 | 耶馬溪、山陽筆投寺 | 上の関、並に大島方面海陸の図海峡 |
| 9 | | 呉海軍工廠 | 厳島のミカド踊（写真） | 早吸瀬戸と豊後水道 | 海地獄（鉄輪） | 耶馬溪、画 | 御幸松（大島） |
| 10 | | 海軍兵学校（江田島） | 大島居 | 早吸瀬戸の大観（豊後水道） | 鉄輪温泉場 | 大分城 | 高山（大島） |
| 11 | | 似島 | 大島居の勅額（厳島） | 早吸瀬戸方面深浅図 | 天然噴気孔の応用（鉄輪） | 大分城、港 | 大島商船学校 |
| 12 | | 宇品港 | 厳島神社の舞楽〔河合英忠〕 | 早吸瀬戸〔著者〕 | 別府市街図 | 大分城、築港の設計図 | |
| 13 | | 白石と其挂燈立標 | 平家の経巻（厳島） | 地藏崎（関崎）と其燈台（早吸瀬戸） | 別府、不老泉 | 松屋寺の蘇鉄 | |
| 14 | | 大藍島と小藍島 | 管弦船（厳島神社） | 佐賀関港（豊後）の上浦 | 別府湾頭の砂湯 | 小ナイアガラ（沈湮滝） | |
| 15 | | 広島の特産田 | | 豊後水道の大観 | 観海寺温泉場 | 大分県種畜場 | |
| 16 | | 鯛漁に用いる縛網船 | | | 観海寺温泉場、眺望 | 久住硫黄鉄 | |
| 17 | | | | | 音原滝 | 阿蘇山の噴烟（肥後） | |
| 18 | | | | | 別府ホテル | 活動せる同山（阿蘇山） | |
| 19 | | | | | 温泉利用の促成栽培場 | | ※筆者注記。二豊とは豊前・豊後の国をさす。 |

表3 小西和『瀬戸内論』の地域別図表一覧とその種類D

| 番号 | 周防と長門 | 関門海峡の方面 | 艦船 | 海陸の生物 | 海陸その他の図 | 気象の図表 | 海水の図表、図景、その他 |
|----|---------------------|-----------------|--------------------|----------------|--------------------------------|-----------------------|-----------------------------|
| 1 | 内海の天の橋立(周防の宮の州)〈写真〉 | 標時球(門司) | 内海航行の乗合船(鎌倉時代) | シロアリ | 瀬戸内方面海地形概図 | 瀬戸内海方面全年気の等圧線及び最多風向の図 | 朔望大潮並に大小潮潮の尺度に对照する図 |
| 2 | 明媚なる室積(周防)〈写真〉 | 関門海峡の概図 | 昔の瀬戸内海遊覧船 | 結構なヤマモモ | 日本の方面に於ける太平洋岸の特的地勢を示す図 | 台風経路の図 | 波濤の平均高度の図表 |
| 3 | 岩国の錦帯橋(周防)〈写真〉 | 早瀬瀬戸の潮汐の概要を示す図表 | 昔の定期船出帆の光景 | キレンゲショウマ | 瀬戸内海方面の地図を括いて南日本の内外両帯とその境界線を示す | 低気圧と風速度の実例を示す図(多渡津) | 水温と気温の对照の図表 |
| 4 | 長沢池(周防) | 早瀬瀬戸、潮流概図 | 東洋汽船会社の代表的汽船(天洋丸) | コカキツバタ | 瀬戸内海方面、地質概図 | 風力の変化を示す図(多度津) | 瀬戸内海の水温を豊後・紀伊の両水道のそれに比較する図表 |
| 5 | 山口の亀山公園〈写真〉 | 早瀬瀬戸、潮流断面図 | 日本郵船会社の代表的汽船(加茂丸) | 鯛の卵が発育して孵化する順序 | 瀬戸内海方面、山岳並に火山概図 | 内海の夕風の原因を示す図【著者】 | 瀬戸内海の海水の比重を示す |
| 6 | 宮市天神(周防)〈写真〉 | 貨車の渡船 | 大阪商船会社の代表的汽船(ぼなま丸) | マナガツマ | 瀬戸内海、島嶼の布置を示す図 | 瀬戸内海方面空気同温線の図 | 瀬戸内海方面を玄界灘より瞰下する図表 |
| 7 | 羊菌の化石(長門) | 関門連絡船 | 瀬戸内海に専用の汽船 | 可憐なイカナゴ | 古昔の瀬戸内海海図 | 気温の変化を示す図表 | 瀬戸内海方面を土佐沖より瞰下する図表 |
| 8 | 貝の化石(長門) | 東洋無比の製鉄所(筑前) | 内海縦航の定期汽船 | 平家蟹 | 内海方面の断面地質図 | 水蒸気張力の変化を示す図表 | 船舶通航信号と潮流信号 |
| 9 | 秋吉台(長門) | 壇ノ浦と其燈台 | 遊覧的の定期船 | カブトガニ | 内海方面、高低と深淺の図 | 空氣の湿度の変化を示す図表 | 海の深度階の高度を比較する図表 |
| 10 | 秋吉台、滝穴 | 早瀬瀬戸の急潮 | 快遊船紅葉丸 | ナガイトカケ貝(鳴門海峡) | 内海方面、古図 | 瀬戸内海方面全年降水量分布図 | 米人の納社礼 |
| 11 | 海軍練炭製造所と那智松原(徳山) | 関門関の大観 | 枚方のクラハンカ船(淀川) | 備前クラゲ | 昔の西洋人の日本地図 | 降水量の比較を示す図表 | 瀬戸内海遊覧地図 |
| 12 | 大嶺無煙炭採掘所 | 赤間宮(下関)〈写真〉 | 物売り舟[小杉未醒] | 借老同穴 | 昔の西洋人の内海方面の図 | 降雪の季節と其期間日数を示す図表 | |
| 13 | | 安徳天皇の御陵(下関)〈写真〉 | 小規模の漁船 | 動物性のプランクトン | 昔の西洋人の内海方面の図 | 天気の変化を示す図 | |
| 14 | | 往古の関門海峡 | 海上の警邏船 | 植物性のプランクトン | 瀬戸内海深淺図 | 降水日数の分布の図表 | |
| 15 | | 小門瀬戸(関門海峡)〈写真〉 | 帆船の群走(燧灘) | イギス | 瀬戸内海、底質地質図 | 降水日数の比較を示す図表 | |
| 16 | | 春帆楼(下関) | 合の子船 | | 瀬戸内海、潮流概図 | 時雨の現実の図表【著者】 | |
| 17 | | 大里の松原 | 見習海員の実習(国後丸) | | 第四紀に於ける瀬戸内海方面の海陸の分布図 | | |
| 18 | | 平家の御座船 | 楽しき海上旅行 | | 地質時代第三紀に於ける内海方面の海陸の分布図 | | |
| 19 | | 下関に於ける文久3年の砲戦 | 戦闘艦安芸 | | 内海方面の磁力の偏差を示す図 | | |
| 20 | | | 我が艦隊の遊曳(周防灘) | | 内海方面古墳分布図 | | |
| 21 | | | 太古の丸木船 | | | | |
| 22 | | | 神武天皇東征の軍艦 | | | | |
| 23 | | | 豊臣時代の軍艦 | | | | |
| 24 | | | 大名の御召船(徳川時代) | | | | |
| 25 | | | 昔の西洋型帆船 | | | | |

淡路と由良・鳴門の両海峡，⑥明石海峡，⑦播磨灘と播磨，⑧讃岐，⑨小豆島，⑩備讃瀬戸と水島灘，⑪吉備の方面，⑫燧灘と備後灘と鞆津の方面，⑬伊予，⑭芸予海峡，⑮芸備，⑯安芸灘と広島湾，⑰厳島，⑱伊予灘と姫島，⑲早吸瀬戸と豊後水道，⑳別府温泉場，㉑二豊と阿蘇，㉒周防灘・上の関・大島，㉓周防と長門，㉔関門海峡の方面，㉕艦船，㉖海陸の生物，㉗海陸その他の図，㉘気象の図表，㉙海水の図表，図景，その他

たへん工夫された地域区分である。ほぼ西から東へ配置するとともに、近畿は①が大阪市内，②が京都市内，その他の近畿が③，それとは別に④大阪湾と大阪・神戸の両港の区分を設けている。海を重点に置く意図で，⑤淡路と由良・鳴門の両海峡，⑥明石海峡，⑦播磨灘と播磨，⑩備讃瀬戸と水島灘，⑫燧灘と備後灘と鞆津の方面，⑭芸予海峡，⑯安芸灘と広島湾，⑰厳島，⑱伊予灘と姫島，⑲早吸瀬戸と豊後水道，㉒周防灘・上の関・大島，㉔関門海峡の方面，のように、旧国や府県で

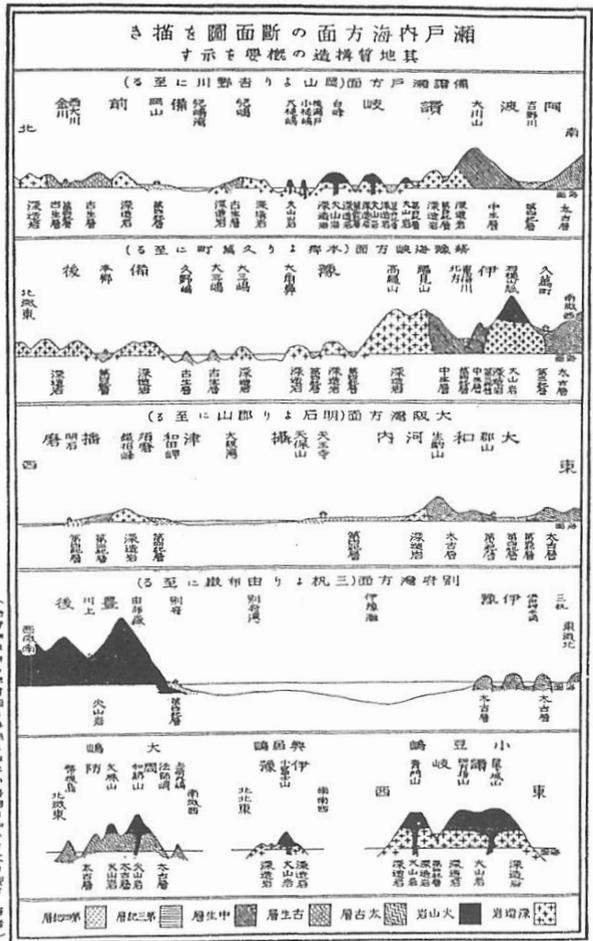


図2 瀬戸内海の地形・地質断面図

(小西和『瀬戸内論』129頁)

両方にまたがるものをうまく配置している。

さらに通常は瀬戸内地域には含まない阿蘇や、京都、近畿（滋賀県、京都府南部）などの図表も挿入されている。また、厳島と別府温泉場は独立地域となっていることも特記される。数の上からは小西の出身県である讃岐が29で最多で、これに香川県に属する小豆島や備讃瀬戸を含むとさらに数は増える。

㊦以下の後半の索引には、㊥艦船、㊦海陸の生物、㊧海陸その他の図、㊨気象の図表、㊩海水の図表、図景、その他など動植物の図や海図、地質図、気候図、地形断面図などが、筆者のオリジナルなものまで含めて多数掲載されている。また、水運、海運、海軍を重視する立場から、艦船が独自項目として立項されているのも注目される。図2はこのうち瀬戸内地域の地質と断面図を5カ所で描いたものである。また図3は瀬戸内海の潮流の大きな流れをつかむために小西自身が編集作図したものである。さらに図4は備讃瀬戸の海況や海底地形、航路、島嶼を示したものである。図3と図4にみるように、主題図をもって地域性格を語らしめるという工夫が随所にみられ、当時のメソスケールの地誌書としても秀逸である。

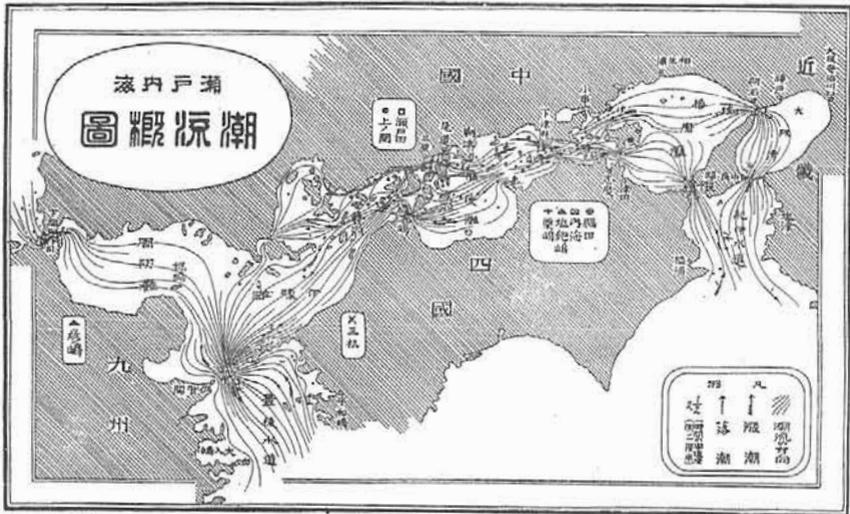


図3 瀬戸内海潮流概況図

(小西和『瀬戸内論』465頁)

4. 終わりに

以上、小西の『瀬戸内論』（1911）の記載内容を、地名や地名群、彼独自の地域区分や主題図、掲載図表を素材として論じてきた。

以下にその知見を列挙して結びとしたい。

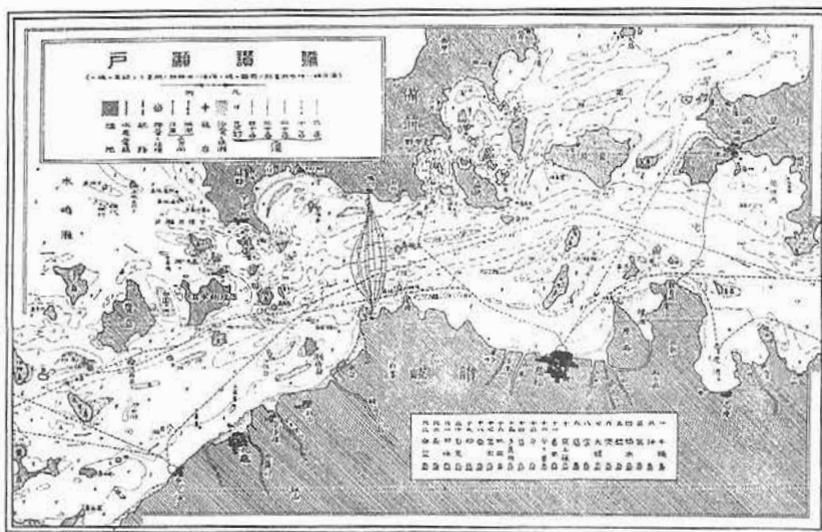


図4 備讃瀬戸詳細図
(小西和『瀬戸内論』461頁)

- 1) 瀬戸内海の範囲を通常いわれる範囲よりも広範かつ柔軟に設定して、京都や大阪の内陸部や滋賀県まで特異な風景や名所はとりあげている。
- 2) 小西独自の地域区分は、行政区画を無視して旧国や湾や海況をまたぐ水域などを重点的に扱い、その結果が巻末の索引によくあらわれている。
- 3) 瀬戸内海の自然と総合的にとらえようとする意図が強く、地質、地形、土性、海洋や海底の状況、気象、動植物などを、独自の主題図や海図、模式図、地形図の簡略化、さまざまな工夫された図表、ダイアグラムを駆使している。この点でもこの時期の著作物では卓越していることを指摘しておきたい（図3・図4参照）。

- 4) 古今の瀬戸内海の風景を描いた絵画のみならず、写真や得意のスケッチも多用しており、その図表のタイトルに加えて、説明も長文であり、単なる挿絵、挿図ではなく、本文と有機的に連関している。
- 5) 人文現象は「人生」という言葉で扱われているが、自然現象との関連でその立地や分布が説明されている。そのため農業にかかわる風景などは量的には意外と少ない。
- 6) 風景の類型化は江戸時代以来の花鳥風月の桎梏も一部には抜けきれていないが、瀬戸内独自の類型として、「巖島式」に代表されるような局所的地盤陥没と風水の浸食による凹凸から、灘や瀬戸、海峡自体を特異な風景としてとらえている。志賀重昂の『日本風景論』（1894）で強調される荒々しい男性美、火山活動などは、瀬戸内地域では別府地域を除いてほとんどないので、その温和な女性的風景が強調されている。
- 7) 日清・日露戦争に日本が勝利したことによる国威発揚的な内容や表現が多く、外国観光客をいかにこの地域に誘致するか、その観光戦略も絡んで、自然保護と経済効果の双方を狙った国立公園制定への政治的意図が強い。
- 8) 通常的地誌やガイドブックではとりあげない、商船学校やはげ山景観、軍事施設なども、貴重な写真を惜しげもなく使って説明している。

[付記] 本研究は独立行政法人日本学術振興会の科学研究費「環東シナ海・環日本海域の文化交渉と歴史生態をめぐる学術的研究」(22242028, 代表 野間晴雄、「黒潮の道—その地域学的比較研究」2628134, 代表 野間晴雄)による成果である。

主要参考文献

- 郷土資料「岩見沢市各種記念碑等」, 研究調査実行委員会 (2012)『岩見沢市の記念碑』, 岩見沢市教育委員会
(<http://www.city.iwamizawa.hokkaido.jp/ikou/kyouiku/bunka/kinenhi/pdf/all.pdf>)
(2017年7月29日閲覧)
- 小西 和 (1897)『日本の高山植物』, 二松堂

小西和の瀬戸内海論のまなごし（野間）

- 小西 和（1911）『瀬戸内海論』，文會堂書店（『明治後期産業発達史資料 第210～212巻』，龍溪書舎，1994）＊本文の現代訳あり。阿津秋良口訳（1997・1998）『口訳瀬戸内海論 上・下巻』，海南文庫顕彰会。阿津は津森明（1999）のペンネーム。
- 白幡洋三郎編著・合田健監修（1993）『瀬戸内海の文化と環境』，瀬戸内環境保全協会
- 津森 明（1999）「小西和の景観論」，高松大学紀要，第32号，157-162頁
- 西田正憲（1999）『瀬戸内海の発見—意味の風景から視覚の風景へ—』，中央公論社
- フェルナンド・フォン・リヒトホーフエン著・上村直己訳（2013）『リヒトホーフエン日本 滞在記—ドイツ人地理学者の観た幕末明治—』，九州大学出版会
- 町田三郎（1999）「明治の青春—小西和の軌跡—」，純真紀要，No.40，7-20頁（たて書）
- 三好 学（1910）『日本之植物界』丸善
- 無記名（1979）「小西和」，青少年育成香川県民会議／編 青少年育成香川県民会議『郷土に輝く人々 第3集』
- リヒトホーフエン，フェルナンド著，海老原政雄訳（1943）『シナ旅行日記 上巻』，慶応書房
- 柳 哲雄（1994）『風景の変遷—瀬戸内海—』，創風社出版

キーワード：瀬戸内，小西 和，風景，まなごし，国立公園，観光

Key words：Setouchi, Konishi Kanau, landscape, gaze, National Park, tourism

注

- 1) https://www.env.go.jp/water/heisa/heisa_net/setouchiNet/seto/kankyojoho/sizenkankyo/gaikyo.htm（環境省，瀬戸内海の諸元）2017年9月2日閲覧。
- 2) 関係する最大縮尺の海図陸図を用い，周囲0.1km以上の島とした。架橋島は数え，埋立陸繋島は除外した。なお，島嶼数については「領海法」で定義された海域における個数を示した。「領海法」で定義された瀬戸内海は「瀬戸環境保全特別措置法」で定義された海域と比較すると，「豊後水道」が対象外である，「響灘」の範囲が狭いといった違いがみえる。また，島嶼数の瀬戸内海計は，複数県に所属がまたがる5島を実数カウントして内数とした。出典：「日本の島ガイドシマダス」
- 3) https://www.env.go.jp/water/heisa/heisa_net/setouchiNet/seto/kankyojoho/shakaikeizai/jinko.htm（環境省，瀬戸内海の諸元）2017年9月2日閲覧。
- 4) 2017年6月24日（土）に岡山大学津山キャンパスで開催された地域地理科学学会第27回大会，人文地理学会第286回例会（特別例会）共催のシンポジウム「瀬戸内の再発見」。オーガナイザーをつとめられた市南文一教授（岡山大学）に謝意を表したい。
- 5) 南満州製糖は奉天（現在の遼寧省瀋陽）に本社をおく国策会社である南満州鉄道が筆頭株主になった精糖会社。1916年の設立である。満州での甜菜糖（粗糖）の生産を行なうとともに，台湾粗糖を輸入して現地で精糖行っていた。亜細亜煙草株式会社・葉煙草株式会社

社も満州，奉天の会社で日本の専売公社の資本がはいっていた。

- 6) 『新訂 政治家人名事典 明治～昭和』日外アソシエーツ，2003年。
- 7) 小西報徳社五十周年，小西土地総記念碑の碑文『無尽蔵』による。郷土資料「岩見沢市各種記念碑等」（研究調査実行委員会（2012）『岩見沢市の記念碑』，60頁）。
- 8) 目次には別紙挿入の図画として30枚の図が掲げられている。このうち「著者」として著作権を示したのが9つある。そのうち2枚は「瀬戸内海を玄界灘の天空より瞰下する図景」（24-25頁），「瀬戸内海を土佐沖の天空より瞰下する図景」（40-41頁）は飛行機からの斜め写真である。日本で初めて飛行機が飛んだのは1910年と言われるから，この写真を朝日新聞のルートを使った可能性はあるにしても，小西が明治38（1905）年以降の執筆期間に入手したかは不明である。
- 9) 原本では章に当たるタイトルに対して，第一，第二のように章の文字を付していない。さらにその下の節，項以下のも単に漢数字を列挙する書式となっている。
- 10) 中村明（2010）『日本語 語感の辞典』岩波書店，523頁。在野の牧口常三郎が志賀重昂の門をたたいて1901（明治34）年に刊行した『人生地理学』も本義は人文地理学であり，人文と地の関係であるという用い方に近い。
- 11) 現在の国立高等専門学校機構・広島高等商船専門学校。
巻末の索引のタイトルと本文中のタイトルが一部の語句で軽微な齟齬が散見されるが，基本的に本文中のタイトルを重視した。
- 12) このほかに巻末には地名の索引が五十音順にある。ここでも図画の地名が含まれている。総計526のさまざまな地域スールの地名が拾われている。ただし，文中に出てきた地名でも日光や東京などは拾われていない。つまり，この地名索引自体が小西の指す瀬戸内の範囲の最外縁を示すと考えてよい。東は滋賀県の彦根，西は宮崎県の日向灘，南は足摺岬，宿毛，北は丹波の亀岡である。